

『愛することの回復へ』 ヨハネ21:15-17

21:15 彼らが食事をすませると、イエスはシモン・ペテロに言われた、「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。ペテロは言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたをご存じです」。イエスは彼に「わたしの小羊を養いなさい」と言われた。

21:16 またもう一度彼に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。彼はイエスに言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたをご存じです」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を飼いなさい」。

21:17 イエスは三度目に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。ペテロは「わたしを愛するか」とイエスが三度も言われたので、心をいためてイエスに言った、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を養いなさい」。

●序論

曾野綾子さんという作家の「受けるより与える方が幸いである」というタイトルの本。ご存じの方も多いと思いますが、彼女はカトリックのクリスチャンの方で、作家であり、また評論家としても有名な方でした。今年の2月に天に召されたそうです。

この本の最初の方に、様々な発展途上国や戦争や飢餓、問題のある国々に遣わされているシスターたちの姿が紹介されていました。

「何のためにそういう生活を？」と言う人がいる。・・・あるシスターは、「神に会ってしまったから仕方がないんですよ」と答えた人もいた。

強いて言えば、彼女たちは手応えのある人生を生きている。…

「イエスさまと出会ってしまったから仕方がない」というのが、人生を方向付ける答えとなる、そんな不思議を、クリスチャンは経験できるということでしょう。

●本論

I. そこに回復へのプロセスがある

有名な使徒ペテロ、かつてあの十字架の事件が起こる前夜、彼は「主よ、…あなたのためなら命を捨てます。」(13:37)とまで公言した人でした。

しかし、イエスさまは、そんな彼に言いました。

イエスは答えられた。「わたしのために命を捨てると言うのか。はっきり言っておく。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう。」(13:38)

そしてその通り、ペテロは三度にわたって、イエスさまとのかかわりを否定します。

彼の「あなたのためなら命をも捨てます」という言葉は嘘ではなかったでしょう。

しかし、それは「自分の弱さを知らなかった時の言葉」であったのです。

あの時、イエスさまとペテロとの間に”対話”があるように見えたが、実際にはイエスさまの言葉はペテロの心には届かず、ペテロの強い言葉と主張だけが、

印象深くそこに響いていたのが実際でした。

ヨハネはこのペテロの記事を、拾い上げることを通して、彼の「回復の物語」を、わたしたちに紹介しているのです。

特に彼には、いやしと回復が必要だったのです。

裏切りに対する赦しと、自分の弱さを正直に見つめ直す時間。そして癒される機会です。それが、このところでの対話です。

ここから、私たちの人生も、主の恵みによって築き上げられてゆく秘訣を見えています。

それは、イエスさまとのゆったりとした対話の中に入ると言うことです。

ペテロがそうであったように、私たちも時に、”神さまの御心知らず”の時がある…

そういう失敗を通して、救い主イエスさまとの本当の対話のプロセスに入れていただくのです。

時間をかけてゆっくりと、聖書を通してイエスさまの御言葉に耳を傾け、それを味わうのです。そうして、そこで信仰の回復があります。

そういう中で、自分よがりな焦りを治め、自己卑下や自己憐憫からも癒され、そして、”自分を知っていて下さるイエスさまのお言葉”が聞こえてくる…、そういう時間をいただいていくのです。イエスさまは、せかしてはいません。

これが、恵みによって建てられる、それが信仰回復の秘訣です。

Ⅱ. そこで「愛」のみが問われている

キリスト教式の結婚式で、司式者が尋ねているのは、「愛」のみです。「あなたは彼を、彼女を愛していますか？」ということです。

実に、今日お読みしているところでも、イエスさまがペテロに向かい問うているのは「愛」のみです。

「あなたは、わたしを愛するか？」です。とてもシンプルで、真実な問いかけです。

かつてペテロは、「あなたのためなら命をも捨てます」と宣言しました。

それは、だれの耳にも、頼もしい言葉に聞こえたことでしょう。

それから、挫折を経て今改めて、そのイエスさまが尋ねられたときのペテロの答えは、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じます」。というものになりました。

それは、かつてのような、力強さも、歯切れの良さも感じない、もどかしい答えのように聞こえます。でもそれが自分の弱さを知ったペテロの心からの告白でした。

3度に渡る問いかけは、3度彼がイエスさまを知らないと否定したことに呼応するものでしょう。そして、この問いかけと応答を通して、彼が負っていた罪責感や劣等感、またイエスさまに対する負い目が癒されていきました。これこそイエス様との対話です。

今日も私たちの信仰生活の中で、イエスさまご自身から問われる唯一のことは、「愛」のみです。

「あなたは私を愛するか？」これがイエスさまの、わたしたちへの問いかけです。

最初に紹介したシスターたちの献身の生涯も、そして今ここに生きる私たちの生活も、イエスさまの愛に支えられ、その問いかけに応答してゆく歩みとされているのです。

Ⅲ. そこに、素直な応答がある。

現代を生きるわたしたちは、ある意味複雑かもしれません。ほかのいろいろな”問いかけ”を気にしながら、人の目や反応を気にしながら歩んでいることでしょう。

あのペテロもまた、問われて…そしてイエスさまを否定しました。

そういう挫折を経験したペテロが、ここでイエスさまに尋ねられています。

3度も尋ねられた…ということで、ペテロ自身は心を痛め、悲しんだ…と。

信用されていないと感じたからか、そこにイエスさまの満足のいく答えでなかったからだろうか…、そう想像される方もいらっしゃるかもしれません。

よくカルト宗教は、その質問する人が正解とする答えが出るまで問い続けられると聞きます。そして、マインドコントロールされていくのだそうです。

しかしイエスさまは違います。ここで3度尋ねられた質問は、先ほどもお話ししたように、失敗者ペテロの素直な心をひきだす、彼にに対するイエスさまの配慮でした。

そのペテロの答えは、かつてのようなだれもが賞賛・満足できる100%素晴らしい力ある答えではありませんでした。

しかし、イエスさまは、このペテロの不十分で、もたついた答えを受けたからこそ、「私の羊の世話をしなさい」と使命をおゆだねになったのです。

、今日お読みしたところのペテロは、イエスさまだけに目を向け、素の心を向けています。かつての自分の弱さを知ったペテロは、自分の持てる精一杯の愛を、”ただイエスさまが知っていてくださる”、そのことに信頼を寄せたのです。

等身大の自分自身をささげて、イエスさまの力を頼るようになったのです。

:17 …イエスに言った、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」。

そしてイエスさまは、そのありのままの素直な答えをうけて、彼に御自身の羊を養うようにふさわしい信仰と認められたのです。

私たちは、周囲からのいろいろな問いかけを経験することがあるでしょう。

なぜクリスチャンになったの？ なんてそんなに熱心なの？…などなど。そして私たちは、そこでふさわしい”信仰的な答え”を探ることがあるのかも、そう思います。

最初に紹介したシスターが「何のためにそういう生活を？」と問われたとき、「神に会ってしまったから仕方がないんですよ」と答えた人もいた…とありました。

「神さまにあったら、こうなっちゃった！」という、ある意味肩の力の抜けた答えです。

ただわたしが、どうこうしたかったからではなく、神さまに救われて、神さまがこう導かれて、こうなった…という自然さが魅力です。

今日のイエスさまの最初の質問を振り返るとこうありました。

:15…「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。

あのペテロにとって、かつては「だれよりも、他の弟子たちよりも…」ということのために、突出した発言、行動…それを目指していたその姿が思い浮かびます。

しかし挫折を経て、イエスさまの対話の中にあるペテロは、この「誰よりも」に反応しませんでした。

ただ、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたをご存じます」と、そのすべては、弱さも足りなさも含めてイエスさまに知っていただいていることに明け渡したのです。

自分が握りしめて、こうならなければ…ではなく、イエスさまに取り扱われて、変わっていく…。わたしたちの信仰の歩みというのは、イエスさま始まりで、イエスさまによって変えていただく歩みなのだとわかることなのです。

ですからペテロの応答の言葉は、わたしたちの応答ともなるのでしょう。

「主よ、あなたはすべてをご存じます。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」。

自分の不十分あり、足りなさあり、でもイエスさまにすべて知っていただいている、だから、わたしたちはそこでイエスさまと出会って、ただこの方についていくことでイエスさまの働きに参加することができるようになるのですね。